戦乱学級　～ヴェリーペア戦記～

初緑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
戦乱学級　～ヴェリーペア戦記～

【Ｎコード】
Ｎ０１６１Ｙ

【作者名】
初緑

【あらすじ】
大学受験を控えた３－３の生徒達は、始業式の日、見知らぬ世界に迷い込んでしまう。そこは人々が甲冑をまとい、剣を手にした、それまで親しんできた日常とかけ離れた場所だった。なぜこんなところに来てしまったのか、どうすれば元の世界に帰ることができるのか。ちょうど始まった大戦乱の中、彼らは否応なく戦いに巻き込まれていく。／／【注意】血などの描写が結構あります

1

松凪涼一は走っている。

すでに足の筋肉は悲鳴を上げていて、腕を振る気力も萎えつつある。

見知らぬ山奥で、道なき木々の隙間を、顔中にひっかき傷を作りながら、それでも走っている。

追っ手は迫っていた。男が三人だ。理由はわからないが、混乱する中で聞き取れた「殺せ」という言葉が彼を突き動かしている。

……どうしてこんなことに！

膝ほどもある草を蹴りながら、今まで何の疑いもなく抱いていた自信が崩れていくのを感じる。

陸上部のホープ。短距離のエース。日本一。

悪路ではこんなものだ。薄汚れた男たちを引き離すこともできやしない。

息切れも間近だった。ペースコントロールなどしていたらあっという間に追いつかれていただろうから全力疾走しかなかった。おかげであと数秒で足が動かなくなる。

そして……殺されてしまう。今朝まではニュースの向こう側だった事態が、しかし今の涼一にはひどく生々しい。

あの男たちは自分を殺す。間違いない。ちらりと見えた刃物は、護身用というにはあまりにも巨大で、使い込まれていて、禍々しか

った。不良だのヤクザだの、そんなレベルを遙かに超えた暴力の臭いをまとっていた。

まるで……まるで、そうだ。山賊のような……

ふと、足が宙を踏んだ。

「っ！？」

急に眼前に広がった景色が、彼を絶望させた。あまりにも広大な森。おそらくこの山からずっと続いているのだろう。その向こうにそびえ立つ巨大な山が、左手に広がる湖が一気に視界へ飛び込んできた。

前のめりに倒れながら、涼一は目を疑う。

山を挟むようにして浮かぶ二つの太陽。

その意味を深く考えるまもなく、彼は崖を転がり落ちた。

戦乱学級

始業式が終わった。

小学校、中学校、そして高校、一年で三回ずつ繰り返されてきた行事。
三年生の彼にしてみれば、一月の始業式は人生で最後の始業式であるはずだった。進学予定の大学にはないと聞いている。

始業式にいつも心躍るのは、久しぶりに級友と会えるからだろうか。それとも、退屈だった朝から晩までの塾通いから解放されるからだろうか。とにかくすぐにセンター試験がある。浮かれてばかりはいられない。

「松凪、陸上の推薦でいいとこ行けたんでしょ？　もったいない」

講堂から教室へ戻る道すがら、藤堂美子に話しかけられた。

「あたしだったら絶対飛びつくのになぁ」
「いや、まあ、俺もそうは思ってたんだけど。家庭のジジョーだよ家庭の」

実際はそこまで重い事情でもないし、推薦可能枠になんとなく満足いく大学がなかっただけの話ではある。というより、藤堂美子も弓道部でそれなりの成績を残していたはずだが。

「ダメダメ、全国で優勝しなきゃ。それにあたし、弓道は高校までだし」

ひらひらと手を振る美子は、ぴったり全国平均身長の涼一から頭一つ低い。

「彼氏できなかったもんなぁ。やってる間は楽しかったけど、その結果があれじゃ、どんと後悔」

「彼氏、できなかった？　越知はどうした」
「ダメだよ松凪君、それ禁句」

後ろから背中を叩かれた。久住栄一、涼一の後ろの席の、確か帰宅部だ。
見れば美子はむっつりフクレている。

「越知君、あんな人でしょ」

と言われ、想像するだにたやすい。なるほど、美子も勘違いしてしまった生徒の一人であった。だが一時期の越知は、涼一から見てもそう思えるほどにアプローチが激しかったはずだった。まさかあれが素か。

「うおおい、松凪ッチ！　ちょっとちょっと！」

この声は噂をすればなんとやらだ。クラスメートをかき分けて越知知治が逆行してきた。

「おまえ、なんか用があるなら教室でいいだろ」
「いけねぇよ忘れちまうもん俺。ほれ、これ！　いいか、誰にも見られないように開けろよ」

ノートの切れ端を押しつけてくる。軽いノリと端正なマスクで騙した女生徒は手足の指ではきかない。さらにバスケ部ともなれば誰も放ってはおかないだろう。
美子への仕打ちと似たようなことを三年も続けて、未だに被害者が絶えないのだから相当のものだった。

「おお、美子ちゃんじゃないの。髪の毛おろしたの？」

次の瞬間、張り手がとんだ。

「越知が悪い」との全会一致を得て、美子の暴力は不問に。涼一らは、もうほとんど来ることのなくなる教室へと戻る。

これから短いホームルームがあって、後は帰るなり塾へ行くなり、教室で自習してもよい。一応進学校であるから、たいていは塾に行くか、自習するかだ。

窓際の自席に座った涼一は、先ほどねじ込まれたメモに目を通した。普段越知知治とはあまり交流がなく、したがって基本的にはお互いに用もない。

十二時に屋上

「おお、なんスかそれ」

前の席から、小橋絵里が振り向く。なにを感じ取ったのやら、とにかく何かにつけ臭いをかぎ取ることには長けている女子だ。だてにメガネではない。

「見てわかるだろ。呼び出しだよ呼び出し」

「これは男の字……というより、越知サンの字ですね」

恐ろしい女だった。

「まさか、越知サンが今まで特定の女子をパートナーにしなかった

のって……」
「やめろバカ、寒気がする」
「お、越知君が松凪君を！？」

隣で悲鳴を上げたのが佐伯いつなである。机を挟んで藤堂美子と進路について話していたはずだった。その美子は苦い顔をしている。

「ダメだよ！　そ、そんな不潔なこと！」
「こら、本気にしたじゃないか」

ため息をつきながら涼一。暇だからいいが、すごくウザい。

「まあまあ。男同士だから不潔って考えには賛成できませんね、いつなん」
「違ぇだろそこは！」

それで被害が増えなくなるならいいけど、と毒づく美子を後目に、いつなはかなりショックを受けているようだった。隣の席になった初めはまともに口をきかなかったほどウブな女子だ。そっち方面にも疎いというか、潔癖そうである。

「松凪ー、おい、松凪！」

強烈な大声。顔は見えずとも一発でわかるのが炎条寺陽之の特徴であった。加えるなら、涼一と同じ陸上部だ。

「ホームルームのあと、いっかい部室集合な！　挨拶あるから！」

手を振って答える。
絵里がずいと身を乗り出してきた。
「で、行くんスか？」
「え？　いや、どうしよう」
なにか用があるなら教室で言えばいいのだ、と先ほども直接言った。わざわざ呼び出して内緒話をするような仲ではないし、呼び出してリンチするような仲でもない。
「襲われるかもしんないですよ。写真撮っていいですか」
心なしか、ギラギラ目が輝いている。太陽がメガネに反射しているのだろうか。
「おまえ、変な趣味あるよな……」

越知を問いつめても「内緒だよナ・イ・ショ」の一点張りで、ならば行かぬというとそれでも構わないとのことである。
「しかし行かぬは一生の恥と言うでしょ、松凪っち。俺だったら行くね」
用件もわからずに恥がどうのと言われたくはない。
「どうした、松凪。越知の言うことを真に受けてどうする」
美男美女の多いといわれる三年三組だが、男のトップは間違いな

く風間雷太であろう。女子のトップは、今は教室にいない柊雪子だというのが世間一般の噂である。ただし女子に関してはランキングがあまり一定しない。

その風間雷太、弁護士の親にあやかり有名私立大の法学部を受験するというインテリぶりだが、性格自体は一本気で正義感に溢れているため、男女問わず人気が高い。

にも関わらず浮ついた話がないのは、彼が幼なじみの式家麻尋にベタボレであるという公然の秘密による。なんと幼稚園の頃から片思い中であるというのだから恐れ入る。

本人は誰にも気づかれていないと思っているようだが、麻尋本人ですら知っている。彼女は彼女でずっと雷太の告白を待っている状態で、実は両思いであることを知らないのは雷太だけという、聞いている方がイライラしてくる純な関係であった。

とりあえず今は関係ない。

「八割が嘘でできている奴だぞ」

「大事なのは残りの二割だぜよ。信じろ松凪っち」

越知の口の回りっぷりにはある種の敬意を表する。そこまで秘密にしておきたい用事がなんなのかはさっぱりわからないが。

「そういえば松凪」と雷太。「大学でも陸上はやるのか。推薦蹴ったんだろ」

涼一は曖昧に頷くと、そのつもりではある旨を伝える。

「まあ、プロ目指してるわけじゃないし。自分が一番になれそうなレベルのところに行く」

「朝から晩まで走ってたもんなぁ松凪っち。だから彼女とかできなかったんよ」

越知に言われると少しムカつく。部活と遊びを高レベルに両立する彼ほどに、涼一は器用ではなかった。

越知、雷太の二人から離れ、席に戻る。それと同時に担任が入ってきた。

級長栃木樹木の号令。

また一日がすぎてゆく。

とんでもない激痛で、うめくと同時に目が覚めた。開眼一番、自分が遙かな上空から転がり落ちたのだと思い出す。土の匂いが鼻をくすぐり、草木のすれる音が静かな森を占める。

起きあがろうにも、どこかに力を入れるとどこかが痛むという有様だった。いや、かすかにしか覚えていないが、死を覚悟するほどの高さだった。痛むだけマシと考えられないだろうか。

動きようがないので耳を澄ましていると、どうやら男たちは追いかけてこないようだった。もしかしたら迂回しているのかもしれないが、涼一がそこまで魅力的な獲物かと考えると可能性は低そうだ。

体が動かないついでに頭を動かす。ここがどこなのか、自分がどうしてこんなところにいるのか、自分はいかにしてこんなところにいるのか。

なぜなら、彼は学校の屋上にいたはずだからだ。

ほんの十数分前のことである。

都市部にある彼の母校には、当然こんな森も、山も、先ほど見えた湖などもない。だいいち、太陽は二つも存在しない。

追ってきた男たちのように屈強で薄汚れた人間は珍しいし、あんな刃渡りの長い凶器などそれこそあり得ない。見たことがない。

ないない尽くしで全く答えが出そうになく、ぐるぐると同じ考えが脳裏を走る。

学校の近くではない。

日本でもない。こんな絶景、あれば何かでお目にかかっていてよさそうだ。

というより……見間違い出なければ太陽が二つ。

地球ですらない？

「バカか」

声に出して否定せねば、どうにも不安だった。

彼が十数分前にいた場所が地球であれば、そこからわずかな時間で地球以外のどこに移動してしまうというのだ。意味がわからない。

しかしながら、今の涼一には、自分のおかれた異常事態を過不足なく説明することができない。

「あっつ……」

森の中は大部分が陰になっているとはいえ、蒸すような暑さだった。すくなくとも一月ではありえない。走っている間は気づかなかったが、詰め襟の内側が汗でびしょ濡れだ。気持ち悪い。

不快に感じながらも、四肢が動かせないのでは脱ぐこともできない。しかも最悪なことに、また意識がなくなりつつあった。
やはりどこか頭を打ってしまったのか。強烈な眠気の中で、そういえば、と彼は思い出す。

秋月有希は無事だろうか。何事もなければよいが。

2

ホームルームも終わり、それぞれが思い思いに行動する中、涼一は荷物をまとめながら時計を見た。十時半。まだメモの時間には一時間半ある。先に部活に出てもよいだろう。どうせ彼ら三年生は最後の挨拶をするだけだ。

炎条寺陽之と女子陸上部の波田野由香里に声をかけて、彼らは教室を後にする。

「今日の挨拶な、キャプテンの望田のあと、全国優勝のおまえ、やるから」

相変わらずの大声で陽之。

「はあ？」

と、涼一は寝耳に水だ。

「当たり前だろ。てかおまえがやんなくてどうすんだよ」

「そーよぉ。ウチの子たち、松凪君がなにもしなかったらブーイングだからね、きっと」

逃げ出したいがそうもいかない。

途中、宗久太郎と岸巻春子のカップルを冷やかし、水野冷子が颯爽と専門校舎に歩くのを見送る。おそらくいつも通り図書館だろう。

適当にスピーチして、後輩たちに寄せ書きなどもらい、どうにもこうにも、まだ卒業自体は先なのだから中途半端な気分である。今の時期にやっておかないと、入試に落ちた場合に素直に送別できないのだから仕方ないと言えばそうなのだけれど。

後輩と一緒に泣いている由香里ら女子を横目に、彼ら男子陸上部

はそこまで感慨深くもなくダベりあう。
「炎条寺、今何時？」
「あ？　ええと、十一時半だな」
声がデカい。その恐るべき肺活量は長距離に関しての強力な武器だったが、いかんせんペース配分がいつまでたってもうまくならなかったのが炎条寺陽之の高校陸上であった。

最初から全力、というのもまた彼らしくはある。最後まで全力で走れればこの上なく理想だったが。

「ちょっと出てくる」
「ああ、いーよ。つかもう解散でいいだろ。俺走ってこよ」
マジか。後輩を何人か連れてグラウンドに飛び出していく陽之。それを見送りながら、涼一は思わず苦笑した。走ることへのひたむきさにかけては及ぶべくもない。あとは努力の方向性さえあえば劇的に成績が延びるはずだった。

「ちょっと待って、松凪君」
部室を出た涼一の元に、涙を拭いながら由香里が駆け寄ってくる。
「校舎に戻るなら、私も行く。運動着忘れちゃった」
「もしかして波田野も走る？」
「うん。大学までになまっちゃいけないものね」
由香里は他の大部分の部員と同様、大学でも走るつもりのようだった。

由香里と別れ、屋上への階段を上がる。校舎内は今までと比べて騒がしい。おそらく、これからは受験を迎える生徒たちの自習室として機能するのだろう。教室の中には数人の生徒……森部綱吉、寿奈津のガリベンコンビと、乱堂忍、余市隆弥、鳴島鳥夫のオタク連

中が何事か話していた。
十分前だったが、扉の前にはすでに越知がいた。キザったらしく指で挨拶すると、彼は涼一のために道をあける。
「邪魔が入っちゃ台無しだから。見張ってるの」
用があるのは越知ではなかったのか。
「俺ぁね、せっかくだからイイコトしようと思って」
そのイイコトが涼一を呼び出すことのようである。意味不明だ。
扉を開けて屋上にでる。
今日は風が冷たい。暖冬と言われているが、夏に比べて寒いことにはかわりない。
抜けるような空の下、フェンスの前に、女子が立っていた。
同じクラスの秋月有希。
「げっ」
と心の中で思い、振り返る。越知がニヤニヤ笑いながら扉を閉めるところだった。
ハメられた。
秋月有希は……クラスの中でも比較的おとなしい部類に属す。メインストリームの騒がしい女子の端っこに位置する、上位ではないが下位でもない、比較的無難な立場の目立たない生徒だった。涼一との接点は越知以上にない。
しかし、二人きりの場所に呼び出され、その用件に思案を巡らすほど彼は鈍感ではなかった。有希の思い詰めたような顔が痛々しい。

松凪涼一、この手の空気は苦手だった。

有希は涼一に気がつくと、哀れなほどに狼狽した。

「あっ」

とだけ。確かに何か言おうとしたが、それ以上が詰まって出ない様子だ。

かたや涼一は涼一で、なんと声をかけるべきか迷っている。「なんの用」とはストレートに過ぎるし、天気の話題はあまりにも不自然だった。クラスメイトが屋上で交わす挨拶ではない。

越知を呪いながら、しかし黙っていてはいられない。一歩近づくと、有希の体が硬直するのが見て取れる。

「お、おす、秋月」

もはや涼一の頭も混乱しつつある。このような状況に放り込まれたのも初めてだから、丸く納める方法も知らない。

うまい具合になにか話題がないかと頭を空回りさせていると、

「あっ、あの、その」

と、声を押し出すように有希が話し出す。長い髪の毛が風で揺れているのを左手で押さえつけながら、

「私、松凪君のことが……」

いきなり核心だった。

心の準備もできていなかった涼一が反射的に遮ろうとしたとき。

「す、」

確か、その後だ。

体が痙攣し、走り抜けた痛みに悶絶する。
目を開ければ、先ほどとかわらず森の中だ。姿勢も変わっていない。仰向けに倒れ込んだまま、満身創痍のまま。

そう。
あの時、なにかが起こった。
涼一の両手が有希に触れるか触れないか、その瞬間に有希が消えた。

それどころか屋上も、町並みも、空もすべて消えて、
気がつけば森の中だ。

そうだ。
わけもわからずさまよっていると、急に男たちが現れて。
日本人とは思えぬ顔立ちと体格、そして傍目にも異常なボロに身をまとい、異形の刃物を持った男三人。

そいつらに追いかけられて、今。
泣きたくなってきた。
「なんか、悪いことしたかよ」

しかしながら、泣いている訳にもいかなかった。

ギシギシと、まるでそれぞれのパーツが別物のような有様になってしまった体をどうにか動かし、とにかく起きあがる。どこか動かす度に全身が痛む。むしろこの痛みに涙が出そうだった。

あたりは静かだ。
転がり落ちてきた崖を見上げる。戻れそうにない急勾配だし、戻

る気も起きない。あの連中がまだいたら、今度こそ命がないだろう。

「殺される……ねえ」

そんな風に感じたことなど、これまで生きてきて一度もなかったはずなのに。

逃げている間はずっと確信していた。それを思い出して、今更ながら悪寒を覚える。

あまりにも痛かったので、移動する前に体を点検した。詰め襟とシャツを脱いだらかなり快適だ。幸い、骨折などの致命的なものはなく、ほとんどは打撲だった。あとは頬の擦り傷と本当に軽傷だ。崖は二十メートルほどもあることを考えると出来過ぎである。

上半身裸のまま歩き出す……どうせ誰も見ていない……まずは、ここがどこかを確かめねばなるまい。先ほど見た景色は夢か幻か、それとも現実なのか。考えるのはそれからだ。

森は鬱蒼としており、草むらやツタなどで非常に歩きづらかった。聞き慣れぬ鳥の声、獣の声が遠くに聞こえ、もしや熊など出やしないかと焦る。

崖を背にすれば、どれほど時間がかかるのかはわからないが、いつかは出られるはずだった。日はまだ高い。

「好き、です」

脇道いっさいなし、直球の告白。考えてみれば、秋月有希に変化球を求めるのは酷であるように思えた。

有希とは、確か一年から同じクラスだったはずだ。はずだ、というのは前述の通りで、ただ同じクラスだっただけだからだ。挨拶以上の会話に覚えがない。

さればこそ、なにも浮かばなかった。決して経験豊富ではない涼一である。中学のころ、ませた同級生とお遊びのようなつきあいをしたのがそれで、休日にサッカーができなくなったのがイヤで一ヶ月で終わった。高校で陸上部に入ってからはつねに走っていたし、誰かに惚れるような余裕は持っていなかった。

その点でを補足すると、涼一は明らかに走ることに惚れていたと言える。走り続けたことは、全国で最も早く２００メートルを駆け抜けた要因の一つであっただろう。２０秒７７は歴代の覇者に比べても遜色ない。

だから、有希の放った四文字は、彼を混乱に陥れるには十分だった。加えて言えば、やっとのことで思いを告げた有希は顔を真っ赤にしてうつむいている。反則である。

なにか喋らなければならぬ。ではなにを？　なにを言えば、この恥ずかしくも気まずい状況をほぐすことができる？

涼一が困っていると、背後で机の崩れるような音がした。踊り場のあたりに積んでいたものが崩壊したのか知らないが、彼がそれに気を取られると、せきがきれたように有希がまくし立て始める。曰く、

「あ、あの。急にごめんね。でも、その、一年の頃からずっと……走ってるのを見てて、えと、すごくかっこいいなって思ってたの。

最初は本当に、ただかっこいいなって。朝、私が登校する時間、いつもグラウンドで練習してたから、それ見てたの」

人にほめられるのはいつも恥ずかしい。だが今はそれよりも、この空気のフォローをさせてしまっていることの方が問題であるように思える。とはいってもやはり、なんと返答すればいいのか皆目見当つかぬ。

「私、運動とか苦手で、だから私にできないことをがんばってるのがすごくかっこよくて。走ることが大好きなんだろうなって、お話とかしたかったんだけど、私ってこんなのだから、男子とお話しなんてできなかったし、松凪君、いろんな人と仲良くて、私なんか地味だし、それで、だからずっと見てたのが、あれ、な、なんかストーカーみたい」

「いや」

と、思わず遮ってしまい、後悔する。しかし有希が自分を卑下するのは止めねばならないような気がしたのだ。話すのが苦手なのは彼も同じだった。

正直いって、自分のことを誰かが見ていたことなど気づきもしなかった。三年間ずっとだ。が、そういえばたまに藤堂が意味深なことを言っていた気がする。あんたのファンがいるとかなんとか。あのころは何のことかわからなかったが、もしかすると有希のことだったのだろうか。

「なんていうか、ストーカーなんて言うなよ」

絞り出たのがこれだから情けない。告白に対してフォローを入れてどうするのだ。そもそも……期待をもたせてしまうことを言うのは……

「俺、そんなに俺のこと見てくれてる人がいるなんて思ってなかった。だから、なんつーか、その、ちょっと嬉しいんだけど」

これに続く甲斐性のないせりふは、運がいいのか悪いのか、結局は言わずにすんでいる。

異変はこの瞬間に起きた。

涼一の知らないところで、時計の針が正午を指した、この瞬間。

腹が鳴った。そういえば昼飯を食べていない。

ガサガサと森を歩きながら、己の運命を呪う。なにが起きたにしろロクなことではない。

体の痛みは、歩いているうちに薄れてきていた。強烈なショックを受けた場合、脳が痛みを勘違いすることがあるときく。ケガの少なさからも、おそらくほとんど無傷に近かったのだ。もう少し早く行動開始してもよかった。

森はまだ続いているようだった。

できるかぎり周囲への警戒は怠らないよう努めた。山で迷った経験などないから、どこまで通じるかは博打の領域だ。獣が襲ってきたような場合は、どの程度の早さで気づけるのだろうか。

そのせいで時間がかかっているのか、もしくはあまりに広大なせいか、いつまで歩いても森を抜けることは叶わなかった。もしや同

じところをぐるぐる回っているのではないかと思い始める。

せめて誰かに会いたい。先ほどのような蛮族ではなく文明の通った、とにかくまともな人間と出会いたい。一人で危険におびえながら見知らぬ土地を歩くことの辛さといったら、これ以上のものはない。明るいのはいいが、時折木の間から見える太陽はやはり、間違いなく二つだった。意味がわからない。

暑いし寂しいし、しかものどが渇いている。思ったより気絶していた時間は長かったのではないか。もし水分が足りなかった場合、どれほど歩き続けられるだろうか。

恐怖。

そんな予想はすべきではない。が、いやでも頭をもたげてくる。

このまま森をさまよっていたら？

のたれ死んで、誰にも見つからなかったら？

そんな予想はすべきではない。

しかし。

涼一はいつしか震えていた。もちろん寒いからではない。

気がつけば、もはや蛮族でも構わなくなっていた。日本語だった気がするのだ。日本であれば当たり前だろうが、ここが日本かどうかも疑わしい今の状況では、たとえ自分を殺そうとしている連中でも出てきて欲しかった。もしかしたら話せばわかるかもしれないのだ。

そもそも、先ほど追われた時点で、白旗をあげておくべきではなかったのか。混乱していたから仕方なかったとは言え……いや、やはりそれはあり得ない。あのときは太陽が二つあるなどとは思いもしなかったのだから。

このとき、涼一はこのように、思考の循環に陥っていた。

その結果、怠らないよう努めていたはずの周囲の警戒が疎かになっていたのは間違いない事実である。幸福なことに彼を襲おうとするものはいなかったが、代わりに響いた悲鳴に、彼は哀れなほどビビった。

悲鳴。

思わず木にすがりついて硬直した涼一の耳に飛び込んだ悲鳴。

女性の悲鳴だ。

直下型大地震である。

一瞬前に涼一は気づいた。なんの前触れもなかったにも関わらず、本能とも言うべき警戒機構が彼を焚きつけた。

「秋月さん！」

不思議なことに、この未曾有の大地震を気象庁は記録していない。いや、ほとんどの人間は、地面が揺れたなどとは露とも思っていない。

しかしこのとき、涼一は確かに感じたのだった。

体が浮いてしまうほどの強烈な縦揺れが校舎を襲った。

叫んでいた涼一は危うく舌を噛むところだったが……そして秋月有希は体勢を崩し、倒れ込むのは避けられないところだと思われたが……とにかく、涼一は半分跳ね跳びながら、有希の元へ駆け寄った。

有希が悲鳴を上げた。

「ま、松凪君！」

華奢な体を抱き留めようと涼一が手を伸ばし、万が一にも外側に倒れまいと有希は賢明にうつ伏せになろうと努力し、

その二人を、闇が覆った。

涼一の目に信じられないものがうつった。澄み渡っていた青い空が、急速に赤く染まっていった。

太陽があまりにも速くビルの向こうに沈み、あっという間に夜が訪れた。いや、前述の通り、それは闇だった。月も出ない、星も瞬かない、まるで墨汁でもぶちまけたかのように、視界が奪われてゆく。

なにが起こっているかなど考えている暇はなかった。手を取らなければ、目の前の有希すらも見えなくなりつつあった。

なにかを叫んだ気がする。

思い出せない。

しかし、彼の記憶ではおそらくこのときに何かが起こったのだった。

なにかが起きて、そして彼は森に立っていた。

覚えているすべてだ。

3

その悲鳴には聞き覚えがあった。なんだったかを思い出すのに時間がかかったが、確か去年、聞いたはずだった。

どうやら学園祭の劇で、と思い至った時点で、彼は悲鳴の持ち主が前の席の小橋絵里だと気づく。己の記憶力にはあまり自信がなかったが、小橋の少し年のいったような独特なハスキー声は聞き分けやすかった。確か、劇で悪漢に襲われる町娘だかの役だったはずだ。

となれば、行動すべきは一つだ。

記憶が間違っているかなど疑いもしなかった。蛮族でなく、赤の他人でもなく、クラスメイトが近くにいるという奇跡のような出来事に感謝することで頭がいっぱいだった。

それゆえ、なぜ悲鳴が上がったのかに思いいたるまで致命的ともいえる時間がかかった。

おそらく、運が悪ければ死んでいただろう。

ほとんど全力で森を走っていた涼一は、だしぬけに藪から飛び出してきた影となす術なく正面衝突した。

同時にうめき声をあげた涼一と何者かは、見ているものがいたら笑い転げるかドン引きしてもおかしくないほどに転がった。涼一の方が突進の威力があったようで、つまり影を押し倒す形になる。

影の金切り声が耳元で爆裂し、鼓膜の痛みに顔をしかめる。あまりに距離が近いため逆に誰だかわからない。が、しかし、なんとなく先ほどの悲鳴の主ではないかと思う。

それと同時に殴られた。

いや、殴られたというより張り飛ばされたのだ。もつれ合って転がった二人は、偶然にも涼一が下、相手が上という風な位置関係にあり、また偶然にもほとんど馬乗りのような体勢になっている。俗にマウントポジションという。

そこから繰り出されるビンタが、涼一の顔面を幾度となく襲ったのだった。涼一にはほとんど答えが出ていたが、この調子では相手は全く気づいていない。涼一では思いつきもしないほどの罵詈雑言とともに掌の嵐。

「ちょ、ちょ、こ、こばし、おれ、おれおれ」

この間に一回口内を噛んでいる。計二十発近い攻撃をくらいながら必死でアピールした涼一の声が届いたのか、はたと相手の手が止まった。言うまでもなく小橋絵里である。転がったときだろうか、メガネが半分ずり落ちている。

かなりの近視ときいていた。必死で目を細めてくるが、それでも見分けがつかない様子だ。数秒頑張って、ずれたメガネを左手で直して、

「ま、松凪サン？」

「オス」

誤解が解けたのもつかの間。

「こっちだ！　近いぞ」

と、彼らのほど近くから、聞き覚えのある叫びが聞こえた。
ビクリと体を震わせた小橋は、倒れている涼一にすがりついて……見ようによってはかなり危険な体位であるが、そんなことに気を回す余裕は無い……曰く、

「助けてください！」

涼一はここにきてようやく、聞こえた声が「悲鳴」だった理由に思い至り、戦慄した。

涼一たちが立ち上がると同時に、絵里が現れたのと同じ茂みから、薄汚れた男が現れた。
目が合う。
男が訝しげに首を捻り……そして一つの可能性に至ったと思われると同じくして、涼一も相手の招待を知る。

少し前に涼一を追いかけていた三人のうちの一人だった。

「兄ィ、こっちだ！　二人いやがる！」

図太い、獣の雄叫びのような声であった。体格は優に涼一の倍ほどもあり、ボロの上着から生えた腕は丸太にも見える。あちらこちらに得体の知れない傷跡があり、その一つは左の頬を、首から額まで縦断していた。膨れ上がった筋肉がシャツの下からでもわかる。熊との違いは体毛くらいだ。

彫りが深く、日本人には見えなかった。服装もやけに前時代的である。合成繊維には見えない。映画から抜け出したかのような、それはまさに山賊であった。手にもつのはおぞましき刀剣。

すさまじき大声に気圧された涼一が無意識に下がろうとすると、なにかにぶつかった。絵里だ。

涼一の詰め襟を引きちぎらんばかりに握りしめ、大男から身を隠そうとへばりついている。服を通して、震えているのがわかった。理由は考えるまでもない。

草木が擦れる音がして、新たに二人の山賊が姿を見せる。やはり涼一を襲った二人だ。彼を囲んだ顔に相違ない。

あのときは反射的に逃げ出したため、相手のことなど観察する暇は無かった。だが今となっては、絵里を残して逃げるわけにも行かず（逃げたいのはやまやまだったが）彼女の盾として相対するほかない。

「なんだ、生きてやがったのか」

頭にバンダナを巻いた、吊目の男が言った。大男ほどのサイズではないが、こちらも全身に筋肉がついている。同じ用なボロの服で、腰にはナイフ。兄ぃ、と呼ばれていた。

いったんナイフに手をかけ、しかし吊目はそのまま顎へと移動させた。遠慮なく近寄ってきて、涼一をねめつけるように観察している。

「得物はねぇ。かといって貴族にしちゃ貧相だ。魔族なら逃げ出すまい……その服も見たことねぇな。てめえら、ナニモンだ」

吊目の男の声は、思ったよりも優しく響く。しかし、それが涼一

たちの命の担保にならないことは明白だった。戦力の差は天地ほどにあり、そこから生まれた余裕によるものだ。

だが言葉が通じる。

「……た、助けて。迷ってるんだ。に、日本人だろ？」

「質問してんのはこっちだよタコ。ただの旅人ならムくだけで勘弁してやる。てめえらはどうみてもただの旅人じゃねぇ。だから場合によっちゃ殺す。答えろ、ナニモンだ。どっからきて、どこに行く。目的はなんだ」

やっとのことで言葉を絞り出した涼一への答えはにべもない。

「ロッツ、まだだ」

男の言葉で、後ろのゴリラが動きを止めた。気がつかなかったが、近寄ってきていたのだ。

「おい、こっちも暇じゃねぇんだ」

「……神奈川の明勝高校の、せ、生徒。気がついたらここにいた」

とにかく、自分たちがただの迷い人であることを、どうにか伝えなければいけない、と涼一は考えた。相手がなににしろ、このままでは殺されてしまう。

涼一を落ち着かせたのは、あまりにも異常な状況に白旗を揚げてしまったのと、彼の背中で小さくなっている絵里の存在が大きい。相手をみる限りどんぐりの背比べだが、彼女よりも涼一の方が強いのは明らかだ。守らねばならぬ。

「帰りたいだけなんだ。道に迷って、ここがどこかもわからない」
「迷って、気がついたらここにいた？」
吊目の男は拍子抜けたような顔になって、
「迷っただけだってよ！？　ここで！　貴族院のボンクラでももっとマシな言い訳するぜ」
笑い飛ばした。
「う、嘘なんかつかないっ」
「そうかい」
嘘だと思われた理由が全くわからない。涼一がさらに言葉を続けようとしたとき、吊目の男が動いた。
あっという間だ。
男はベルトから引き抜いたナイフを、躊躇なく涼一の肩に突き立てた。
動きがあまりにも速く……対話でなんとかなるかもしれないと根拠なく考え始めていた矢先のことである。
全くの不意打ちに、涼一の頭は追いつかなかった。左肩から感じるはずの鋭い痛みは、やたらにゆっくりと時間をかけ、脳に届く。実際は一秒もかかっていない間のことである。
「いっ……がっ！」
悲鳴を堪えられたのは、やはり背後の絵里のおかげだった。ある

種の使命感が、喉を突き破って飛び出しそうになる叫び声を留めている。無様に泣き叫べば、その時点で彼の心は折れてしまう。代わりといってはなんだが、悲鳴は絵里があげた。

尋常ではない。ほとんど根本まで埋まったナイフと肉の隙間から、じわりと血が流れ出し、シャツを赤く染め始めている。

「おめーバカだろ？　このあたりに迷い込むなんてできねーんだよ」

男はなぜ断言できるのか。

「ほ、ほんとですっ。う、う、嘘なんか……」

背後の絵里が、ほとんど泣きながら言った。

「ま、松凪君！　かた……肩が」

「大丈夫、小橋、俺は……」

大丈夫なわけがない。痛みはすでに痺れと化し、左半身がだんだんと動かなくなりつつあった。そのことが何よりも恐ろしかった。こんな異物が体を貫いているのに、痛くないのだ！

「本当に、本当にただ迷っただけなんだ……助けてくれ。なんでも持ってっていい。俺と小橋の命だけは助けて、くれ」

男がナイフを引き抜いて、涼一はうめいた。異物感がなくなった代わりに、穴のあいた肩から怒濤の勢いで血が流れ出した。

「あのな、はいそーですかじゃすまねえんだよ……しかたねぇ、ロッツ、こいつふんじばれ」

ゴリラ、いや、ロッツが動いた。のそりと近寄ってきた大男は、どうにか抵抗しようとした涼一をあっさりと組み伏せてしまう。つまり、盾をなくした絵里が一人きりになる。

「お、おいっ！　やめろ、なにを……！」

「てめえが喋る気になるか死ぬまで暇つぶしだよ、オラ」

動くことすら叶わぬ絵里の髪の毛を乱暴に掴む。また悲鳴を上げた絵里の頬を、殴りつけた。

「うるせえのは嫌いだ。黙っとけ」

「な、なにしやがんだ！」

もがいても、ロッツの下からは抜けられない。ぴくりとも動かない。

「おまえ、女捕まえたらなにするかなんてわかるだろ？」

「やめろって言ってんだ！」

「ロッツ」

後頭部を殴られ、顔を地面に打ち付ける。小石が額を裂き、鼻がちぎられたように痛んだ。

「バルポ、おめーやれ。確かこのくらいのがいいんだよな」

今までずっと黙っていた三人目が、指をくわえたまま頷いた。無言で吊目に近寄り、気絶している絵里を受け取る。

「なんだこいつ、結構いいもの着てやがるな。バルポ、破るな。上

等モンだ。高く売れるぞ」

頭がグラグラと揺れる。気絶しかけている中で、バルポと呼ばれた小男が、力なく両腕を垂らした絵里からセーラー服を脱がせようとしているのが見えた。

なにがおこるかなど考えるまでもなかった。

そして涼一はまだ、自身に起こっている変化に気づいていなかった。

上にのしかかっている大男、ロッツが、声をあげた。

「あ、兄ぃ、こいつ」

「ああ？」

戸惑っているようだった。このとき涼一の精神は、自己嫌悪と混乱、痛みに怒り、その他様々な感情が入り乱れ暴走状態にあったため、会話を聞いてはいない。キレていた。なにをいっても聞く耳持たず、人を刺し、組み倒し、あまつさえクラスメートを強姦しようとした連中をどうにかしたかった。それが可能であれば。

「な、なんか、抑えきれねぇ」

可能であれば。

うつ伏せから両手をついて立ち上がろうとした。巨漢にのしかか

られていたが、わずかずつ体を持ち上げることができた。いつの間にか左半身の痺れは消えていて、まったく自由に動かせる。

「あ、ありえねぇ。こんなチビが」

「ロォッツ！　うるせえ、マジメにやれっ！」

両腕の筋肉がちぎれそうだった。無理もない、彼の上には大男である。だが、動く。油断しているのかわからないが、とにかく動く。

「兄ぃ」

「うるせえのは嫌いだっつってんだろうが！　ぶっ殺す……ぞ……」

膝をついて立ち上がろうとする。重い。バーベルでも担いでいるかのように重い。気を抜くとつぶれてしまうだろう。ゆっくりと、倒れないように、体を持ち上げていく。

完全に立ち上がって、荒く息を吐きながら、涼一は吊目を見据えた。

「な……なんだ、ロッツ、なんだそりゃ」

あまりにも重い。大男が押さえ込もうとしているのだろうが、それを振り払うために、涼一は上半身を振る。思ったよりあっさりと重さは消えてしまう。ガサリと、背後でなにかが草むらにつっこんだ。

「ロッツ！」

吊目の後ろに、セーラー服を持った小男と、脱がされた絵里が、

「うわあああっ！」

考えることすらもどかしい。涼一は雄叫びをあげながら吊目へと飛び込むと、なにはともあれ右腕を振りかぶった。

「え、はや……」

男がナイフを動かす前に、涼一の拳が顔面を捉える。感触などわからぬ。妙な軌道を描いてふっとぶ男を見もせずに、彼は小男へと走り出す。

「ぎえっ」

とセミのような叫び声をあげ、小男はセーラー服を放り出した。そのときにはすでに、涼一は懐に飛び込んでいた。先ほどと同じ、右拳で顔を殴る。ふっとぶ小男。

ほとんど無意識だった。その後の行動も同様で、だから涼一にはここの記憶がほとんどない。

彼は絵里との衝突の際に放り出された詰め襟と、脱がされたセーラー服をひっつかむと、絵里の華奢な体を背負い、ともかくここから離れるためによろよろと走り出した。

己がどれほどのことをしたかなど、気づきもしなかった。

1

小橋絵里とは、三年になって初めて同じクラスになった。といってもよく話すようになったのは、五月過ぎの席替えの後からだ。

窓側、涼一の前の小橋が、

「松凪サン、彼女いるんですか？」

と尋ねてきたのが最初だった。メガネをくいと上げながら乗り出してくる小橋絵里に、最初は驚いたものだった。

「いや、べ別に、いないけど」

「ふうん」

つまらなそうに絵里は前を向いて、会話は終わった。意味が分からなかったが、次の休み時間、

「松凪サン、このクラスだと誰がいいですか？」

今度はメモ帳片手だった。メガネをくいと上げながら。

「え、いや」

涼一は慌てる。ほとんど話したことのない相手に、いきなり告白まがいの挨拶である。

「たとえば、風間サンとか」

「はあ？」

男の名前が出た。

「あ、やっぱり女子がいいんですか？　じゃあ秋月サンとかどうでしょう」

「あ、秋月さん？　いや、話したことねーし」

「ほうほう、顔で判断しない、と。まあ秋月サン、かわいいですけどね」

「なんだよ、急に」

思い返せば、ここで秋月有希の名前がすでに出ていた。

「彼女に求めるコトとかあります？　いやプレイとかではなくて、要素みたいなことで」

それからしばらく、小橋絵里は自分に気があるのではないか、と勘違いしていた。

目に入ったのは、クリーム色の布一面。

悲鳴をあげつつ飛び起きた涼一から、薄布が舞い落ちる。

背中がぎしりと痛んだ。かたい床で寝ていたせいだ。

「こ、小橋っ！」

見回しても小橋絵里の姿はない。それどころか……森ですらなかった。

あちこちにおかれた木箱、鎮座する机に椅子。そして視界を埋め

尽くす布は……つまり、テントのようだ。

「小橋、どこだ！」

「落ち着け」

鋭い声が響く。警戒に思わず体を固めると、三段に重なった木箱の裏から誰かが出てきた。

「彼女は安全だ。一足先に目を覚ました。今は外で食事している」

声は女だ。いや、当たり前だった。彼の前に立っている、甲冑に包まれた人間は、紛れもない女である。

ウエーブのかかったブロンドが映える。銀色の甲冑には複雑な衣装が施されていて、すなわち意味が全くわからない。記憶にある山賊たちといい、本当に映画の撮影ではないのか。

「お前たちの事情はわかっている。私たちはコクグンだ。安全は保障する」

「……こ、こくぐん？」

「シュミット王国正規軍3番隊。私はフラウス・ホワイト。お前もここがどこかはわからないのだな」

なにを尋ねてよいのかもわからず、彼はあっけにとられたまま頷く。

フラウスと名乗った女は、手近な椅子に涼一を座らせ、テントの入り口に歩き、

「コバシ、起きたぞ」

惚けたままそれを見ていると、しばらくして絵里が飛び込んできた。

「松凪サン！」

「こ、小橋。なにもされてないか」

「大丈夫ッス。ありがとうございます。で、でも、その、肩は」

絵里が手を伸ばしてきて、涼一は自分が上半身裸なことにやっと気づいた。

「さっきも言ったが、彼の肩に傷などない。安心しろ」

「でもでも、あんなに深く。血だって……」

「確かに上着に血はついていたが、実際に傷がないのだ。疑うならよく見るといい」

絵里の手が、恐る恐る肩口に触れる。痛みを覚悟していた涼一は、なんともないことに気づいて、自らの右腕で掴む。なにも異常はない。

「う、嘘だろ」

刃は完全に埋もれていたはずだ。血も驚くほど流れた。それが、まったく消え失せている。

「疲弊していることにはかわりない。ゆっくり休め、と言いたいところだが……まあ、まず食べるがいい。外に用意させてある」

言われて、腹がなる。どれほど寝ていたか知らないが、どちらにせよものを口にする機会などなかった。

立ち上がると、頭がグラリと揺れた。先ほどはなにも感じなかっ

たが、ふわふわと漂っている気分だ。
「や、やっぱり寝てたほうが」
「いや、腹、減ってるんだ」
それにここは蒸し暑い。外に出れば幾分快適だろう。
「来い」
フラウスに連れられて、テントの入り口へ進む。
「あ、あの、松凪サン」
おずおずと小橋。
「びっくりするかもしれないけど、その、気を確かに」
ある程度予想はつく。
入り口から外に出る。
予想はつくが……
「……ぐ」
声を漏らさずにはいられなかった。
テントは一つではなかった。見渡す限りのあちらこちらに大きな

テントが張られ、辺り一面を帯剣した戦士たちが闊歩していた。

馬のような生き物には角が生えており、中には翼を持ったものまでいる。誰も彼もが蛮族に負けぬ体躯の持ち主で、笑い声、怒声、様々な声や鎧の音などが響き、なぜ今まで聞こえていなかったのかと耳を疑いたくなった。

ここにきて、涼一は今度こそ思い知ったのである。

ここが、自分の生きていた世界と全く異なる、未知のものであることを。

「バウィエ、旅人が目覚めた。食事の用意を」

先頭を歩くフラウスが、焚き火の燃えカスの前であぐらを組んでいる兵士に声をかけた。

「ウス、お嬢さんはもう一杯いりますか」

「望むだけ出してやれ」

呆気にとられたまま、フラフラと歩く涼一。絵里が手をかさねばすぐにでも倒れてしまうだろう。

バウィエは涼一の腕をとると、用意された簡易食台に座らせる。絵里は隣に、そしてフラウスは対面に座った。食台はこの一つきりしか見あたらず、他の兵士たちは地べたにあぐらをかいている。

涼一の目の前に椀がおかれた。よくわからない、白乳色の粥のようなものだった。隣の絵里は困ったような笑顔で断っている。

「上等なものではないが腹にたまる。食べろ」

差し出されたスプーンを手に取り、しばし湯気のたつ粥を眺める。その様子を眺めていたフラウスは、特に感慨もなく、絵里の方を向く。

「名前はなんだったか」

「え、ええと。松凪サンッス。松凪涼一サン」

「マツ……ナギ……マｔｓナギ……お前たちの名前は発音しにくいな。まあ、いい。せっかくだから最初から話そう」

スプーンが粥の中を潜る。米には見えないが、何かの穀物が盛り上がって、甘い匂いを放った。

「お前たちは気がついたらあそこの、森の中にいて、さまよっていたところを山賊に襲われた。しかしどういうわけか逃れ、ここまでたどり着いた。二人とも知り合いで、学生。カナガワと言うところに帰りたい。確認するぞ、間違いないな」

すくい上げると、湯気が顔にかかった。

迷うわけもなかった。一口で、決壊。多少堅いが噛めぬほどではない。それにつぶれた中から甘い汁のようなものが出てきて、空きっ腹に流れ込んでいく。白乳色の液体はその汁が湯で薄められているもののようで、喉に引っかからない。

「信じがたい話だ」

「でまかせでさ」

瞬く間に空になった椀に二杯目を盛りながら、バウィエという男が言う。短い草色の髪の毛が陽光に映えている。

「こんなご時世だ。住処を追われたガキが紛れ込んでもおかしかねぇ。こうやってメシにありつこうと、どうにか頭を絞ってやがんです」

「口を慎め。このあたりは封鎖されている」

「魔法で張った結界なんて信じられませんや。どっかに穴があったに違いねぇ」

「バウィエ」

魔法、と聞いて、涼一はいよいよ混乱する。魔法、魔法だと？

「さて。信じがたいのは確かだが、お前たちがただの旅人かと言われれば、それもまた納得しがたい。この地域は、我がシュミット王国の魔法士によって全域が封鎖されていて、入り込むことも出ることもできない」

粥をかきこみながら、涼一はどうにかあたりを確認する正気を取り戻した。目に入れたくないファンタジックな連中の向こうに、岩肌が広がっている。

右を向けば、大きな湖のそばだった。その向こうに木立が広がっていて、先ほどのフラウスの言葉から、おそらく襲われた森と平地の境界だった。彼方に屹立した崖が見える。

「だから……お前たちは結界発動時にこの中にいたか、そうでなければ無から現れたことになる。ここでそれを追求はすまい。実際にいるのだから」

このうら若き女騎士は、今まであったロクでもない連中に比べれば物わかりのよい方のようだった。これがどんなに幸運か、そこまで考える余裕はまだない。

「先ほどコバシにも説明したが、賊どもや私がお前たちをただの旅人だと考えないわけは、おおむね服にある」

確かに、涼一たちの学生服はこの風景にはそぐわない気がする。だが、元は軍服だ。似たようなユニフォームくらいあってもよさそうだ。

「材質と縫製にまったく見当がつかないのだ。これほどきめ細やかな作りの服は、少なくとも私たちの国にはない」

「材質……縫製」

つぶやいてみる。変哲もない量産品のはずだった。

「お前たちの体つきもそうだ。まったく旅に耐えうるものではない。コバシはともかく、マｔｓナギ、お前は飢えているようにも見える」

一応陸上部で、それなりに鍛えてるつもりだ。まあ、相撲部などの重量連中に比べたら細い方である。

ましてやここの男たちと比べるのは酷だ。

「だがコバシの言うところ、お前くらいは普通なのだそうだ。その年まで生きていられたのだから、まあ信じてもいい」

信じてもいいとはまた、ずいぶんな言いぐさであった。

「だから私は、お前たちにここがどこなのか教える。まずは、真偽

を確認してからな」

イヤな予感がした。

「今森を探させている。いいか、お前たちの話でもっとも腑に落ちないのは、砂烈団から逃げ出し、無事にここまでたどり着いたことだ」

「砂烈団？」

遠く、木立から兵士が数人出てくる。手に何かを引きずっている。

「しばし待て」

立ち上がったフラウスは、バウィエを連れて兵士たちの元へと歩いていく。

「砂烈団ってなんだ？」

「私たちが襲われたヤツらッス」

見れば、隣で絵里が小さく震えていた。

「お、おい、思い出すな。忘れろ」

「わ、私、殴られ……」

「おい」

肩に手を置くと、びくりと体を硬直させて、

「……スイマセン、三日たってもこれです」

「三日……三日も寝てたのか、俺？」

「はい。私を担いで、森の入り口に倒れてたらしいです。私も目が

覚めたのは昨日で」

三日という数字は、少なからず涼一にショックを与えた。無防備なまま、寝ていた期間が三日。

「ナギ」

こちらに歩きながら、フラウスが言った。

「お前が殺したとしか思えない」

言いにくかったので呼び方を変えたのだろう。

それをぼんやりと考えながら、涼一は次に彼を襲うさらなる衝撃を待たねばならなかった。

お前が殺した。

2

「あの男は砂烈団の副長だ。顔がよくわからないが、間違いない」

フラウスの冷静な声が、涼一の胸に刃物を突き立てた。

「コバシの話ではお前たちを襲ったのは三人。一人はロッツ、もう一人の名前はコバシは知らなかった。奴の名はドレマン。ロッツという男の死体はなかった」

顔がよくわからなかった。

涼一の右手に、鈍い感触が戻ってきた。手が震え、スプーンを取り落とす。

記憶の底に眠っていた光景がフラッシュバックする。

「一撃で顔面を粉砕されている」

「やめろ」

「なにをした？」

「やめろっ！」

うつむいたまま叫んだ。

フラウスの顔を見るのが怖かった。絵里の顔を見るのも怖かった。

永遠とも思える時間が流れた。

「……夢中だったんだ。わからない。なにもわからない」

「しかし、お前たちが砂烈団から逃れる方法はない」

「知らない」

「単純に逃げるなど不可能だ。実際に出会ったお前たちが一番わか

っているはずだ」
「俺じゃない！　人殺しなんか……ただ殴っただけだ！　バットなんか使っちゃいないのに、死ぬわけがあるかっ！」
いつの間にか、喧噪が止んでいた。自分の腹と粥しか見えないが、誰もが聞き逃すまいと耳をそばだてているように思えた。
絵里になにか言ってほしかった。
「……わかった、いい。わかった。忘れろ。お前たちがいたところがここほどに物騒ではないことはコバシから聞いている。この大陸にそんな場所はないが」
しばらく沈黙が流れた。
「話の続きだ。ここはウラナス大陸のやや北、中央に位置する。シュミット王国とシバ領の境だ。魔導後記１６８年。現在この大陸は、大規模ないくさが始まる直前で、私たちは隣国との戦いに先駆け、内憂である砂烈団の討伐にあたっている」
耳慣れない単語ばかりだ。
「お前たちが帰りたいというカナガワは、少なくともシュミットにはない」
あってたまるか。こんなトチ狂った世界と同じ場所に、故郷があるはずがない。
それがどのような答えになるか、涼一は考えないようにしている。
「似たような地名は、西の島国、尭菱にありそうだが、コバシの話

ではお前たちの国はニホンだという。残念だが知るものはいなかった」

人を、殺した？

「だから現状、お前たちがもとのところに帰るのは難しい。そもそも今は結界が張られていて、このあたりからは出られない」

その結界の原理とはなんだ。

「だから、しばらくお前たちの身はシュミット王国が保護する」

涼一が食台を殴りつけた。

その衝撃で、あまりにもあっさりと、木製の簡易食台は折れて崩れる。残っていた粥が地面にぶちまけられた。

「さっきから黙って聞いてれば好き放題、い、言いやがって」

「……その膂力か」

「うるせえ！　なにが砂烈団だ！　なにが保護だ！」

「ま、松凪サン、乱暴は」

「死ぬところだったんだぞ！　なんだよこれ！　言ってるじゃねぇか、帰りたいだけだって！　人殺しだって、ちくしょう、ちくしょう……何で壊れてんだよ。なんだよ、こんな力、俺にはねえよ」

「腐ってただけッス！　だから松凪サン、お、落ち着いて！」

涼一と壊れた食台を見比べながら、フラウスは何事か考えている。

「お、おいっ！　なにやってんだ！　ホワイト将軍、お怪我は！？」

バウィエが飛んできた。フラウスは手で彼を制し、

「その様子だと、なにがあったか思い出したようだな。コバシは気絶していた。お前たちを見つけたときの状況からそれは間違いない。であれば、だ。お前が倒したとしか考えられないのだ。少なくとも二人を」

「た、確かに、殴ったよ……でもそれで、死ぬなんて。う、嘘ついてんだろ？」

「見るか？」

フラウスは平静で、それが涼一にはたまらなく恐ろしかった。冗談でもなんでもなく、この女戦士は、事実だけを述べているのだ。

「嘘だって言ってくれよっ」

「そ、そうッス！　松凪サンが人殺しなんてするわけが」

「お前たちの倫理観はよくわからないが、ナギが殺さなければお前たちは死んでいただろう。コバシ、ナギに感謝した方がいい。お前は死ぬだけではすまなかった。そしてナギ、誇れ。お前は仲間を守ったのだ」

そう考えて納得できるのなら、言われるまでもなく折り合いはついていた。

相手が悪党であろうと、自分の命を狙っていたのだとしても、殺したことにかわりはない。

「コバシにも話していないことがある。お前たちが見つかった、三日前だ。おそらく関係のあることだからよく聞け」

この世界の、どこに関係があるというのだ。起きているすべてのことが、涼一たちの常識とは乖離しているではないか。

「ナギ、お前と同じ服装の少年が、砂烈団の連中に連れ去られているのを斥候が見ている」

「……え？」

涼一と絵里が、フラウスの顔を見た。

「直後にお前たちが見つかったので、理由はどうあれ、斥候がみたのはお前だと考えた。だがコバシの話を聞くに、違う人間のようだ。お前たち、まだ連れがいるのか？」

「……い、いるのか？　ほかにも」

「だ、だって松凪サン。私と松凪サンがここにいるんスから、ほかの人だって」

「ど、どんな奴だった！？　髪は、顔は！」

「髪が黒だということ、お前と同じ服ということ以外わからん。遠目からしか見ていないが、気絶していたようだ」

「なんでもっと早く……」

「お前たちを信頼できなかった。だからコバシから話を聞いた後、裏をとった。それが今、見つかった。だから話したのだ」

回りが騒がしくなった。こちらを注視していた兵士たちが、今度はあわただしく動き回っている。

「さっきもいったが三日前のことだ。私たちはその人間は死んだものと判断している」

なにが言いたいのだ。

「た、助けてやってくれよ！　頼むから」
「無理だ。砂烈団は手強い。救出に手を回す余裕はない」
こんな話をしておいて、なにを言うつもりか。すでに死んでいると判断するなら、なぜ思わせぶりな伝えかたをする。
「だから、お前がやれ」

余市隆弥は、放り出されて目を覚ました。屈強な大男たちに囲まれていて、捕まったときの恐怖がよみがえる。
昨日の夜は物置のような臭い小部屋に押し込められ、怖がっているうちに深い眠りについてしまったようだった。

ＴＲＰＧをしていたはずだった。同じクラスの仲間、乱堂忍と成島鳥夫と、新学期初めの記念キャンペーンをやっていた。
「センター試験のことは考えない」が三人の合い言葉で、ガリベンコンビの嫌悪のオーラを身に受けながら、３－３の教室で。
「えー、じゃあジェイド君の敏捷で十面二個判定ドゾ」
隆弥はダイスを手に取り、これから起こるランダムイベントを決定するために、放り投げた。
ころころ。

「ん、ん？　あちゃー、ファンブったかぁ」

鳥夫が嬉しそうに言った。

「いやはや、こういったランダムイベントで端の数は危険でござるよ、ジェイド殿。で、なにがおこるでござるか」

乱堂忍はさっきからこの調子だ。この中ではもっともディープだと思われる。

「ええと、ファンブルは……ちょ、これマジ勘弁してへへへ」

「はーやーくー、まだー？」

「異世界に召喚される」

「うは、シナリオ崩壊！　きたこれ、きたこれ！」

「さらに六面二個で召喚されるゲームを決める。え、これ違うゲームに行くの？　あるあ、ねーよワロチ」

その時だった。

地震、悲鳴、闇、そして森。

涼一に比べて隆弥はより不幸だった。

ちょうど砂烈団の潜んでいた場所、そのど真ん中に立っていのだ。

「ロッツ、ロオッツ！」

一人が叫ぶ。しばらくして、入り口からのそのそと、ゴリラのような男が入ってきた。

今からなにが起こるのかさっぱりわからず、しかし悲鳴を上げる度胸もなく、隆弥は簀巻きのままがたがたと震えていた。夢、夢と繰り返し言い聞かせるのが精一杯だった。

「お前がやられたのはこいつか」

「へ、こいつは……違いまさ。あのヤロウよりもチビだ。だけど服は同じでさ」

「同じ服だと。ロッツ、間違いねえな。次しくじったらどうなるかわかってるよな」

高圧的に大男とはなしているのは、ライオンのたてがみのような髪の毛の中年だった。隆弥が正気であれば、若い頃のシュワルツェネッガーがライオンのコスプレをしたのに似ている、と考えたことだろう。

「そいじゃあこいつも、そのなんか変なガキと同じ用な力を持ってるかもしれんってか」

「しかしボス、ロッツを持ち上げて放り投げるなんて、しかも副長をやっちまうなんて、そんなことができる奴なんて……」

「ドレマンのヤロウが帰ってこねえのが証拠だ」

「だが、ロッツのヤロウが正規軍に売ったのかもしれねえ」

「んなことしてなんになる。正規軍が、仲間を売ったからって温情をかけるような甘ちゃんかと思うか。減刑なぞされないのはよくわかってんだ。するはずがねぇ。いいか、よくはわからんが、このガキが恐ろしく強え可能性がある。だが今はこんなんだ。なにかいい方法はあるか」

「ボス、そんな奴なら正規軍に特攻させましょうや！」

「バカ言うな、ドレマンの兄ぃをやっちまうんだぞ。敵に回ったらどうすんだ！」

男臭い喧噪の中、隆弥は発狂寸前だった。口々に発せられる己の処遇についての言葉も耳に入っていない。

捕まったときも、その後も、彼に為す術はなかった。内向的で運動の苦手な隆弥は体も小さく、筋肉もついておらず、色白のもやしっこだったから抵抗らしい抵抗もできなかった。何度失禁し、気絶したことか。

もちろん、鏡を見る機会もなかった。

だから、ドレマンらを打ち倒したときの涼一のように、彼もまた、己に起こっている変化に気づいてはいなかったのである。

右目に起きた、劇的な変化に。

3

「……俺が？」

フラウスは頷く。

「どうやったかはわからないが、武器も持たずに二人を倒したのなら、お前は戦力になる。だからこれは私の打算によるものだ。砂烈団掃討に力をかせとまでは言わないが、仲間を助けるというなら、道案内くらいはしてやる。道すがら敵を打ち倒してくれればずいぶんありがたい」

相変わらず表情を変えずに続けた。

「一人くらいならかしてやれるぞ」

なにができるというのだ。涼一は迷っていた。あんなもの、ただのまぐれかもしれないではないか。

だが……だが、記憶が確かならば、あの力は……

「待ってください。松凪サンは目が覚めたばっかりッス。それにそんな危険なこと、させられない」

一撃で相手の命を奪った、あの力はなんだ？

「お前たちを拾ったために二日遅れている。恩をきせるわけではない。これ以上遅れるわけにはいかないから、今から殲滅戦に入るということだ。意味はわかるな」

戦いが始まってしまえば、クラスメートの命の保証はない。いや、確かにフラウスの言ったとおり、もともと生きているかも怪しい状況である。

今を逃せば、その生死を確認することはできないということだ。

戦いが終われば、間違いなく死んでいるとフラウスは伝えたいのだ。

もし生きているのなら、助けるためには今、決断するしかないと。

「……条件がある」

「できるかぎり叶えてやる」

「戦いが終わったら、俺たちを安全な場所まで、連れていってくれ。命の危険がないところまで」

「もとよりそのつもりだ。約束しよう。なんなら装備も持って行け」

涼一の頭が冴えてくる。明確な目的ができたことで、冷静な判断力が戻ってきている。

鎧は不適切だ。見る限りかなり重い。涼一の力がどれだけ強くなったかはわからないが、慣れないものを身につけていては思うように動けなくなるかもしれない。

剣は、剣はどうだ？

「ここからは全員いなくなるのか？　小橋を守ってほしい」

「ここの情報は相手も知っている。私の側にいるのが一番いい」

「松凪サン、なに言ってるかわかってるんですか！？」

「小橋」

突っかかってくる絵里を、涼一は押しとどめた。

「せ、戦争なんですよ！　わざわざいかなくったって、終わった後に探せばいいじゃないッスか！」

絵里の言うこともわかる。なにせ、その類の訓練も受けておらず、知識もほとんどないのが彼らだ。だからこそクラスメートは耐えられまい。

戦いの邪魔になるようなら、砂烈団の蛮族に殺される可能性もある。

クラスメートが生きているなら、助けるには本当に今しかないのだ。

そして、涼一はクラスメートが生きている方に賭けたかった。

「今だけだ。次だけ運が良ければ、俺と小橋、んで誰かわからないが、学校のヤツと三人、とりあえずあてのないままうろつくのだけは避けられる」

「う、運って……」

「突っ込んだりはしない。バカじゃないんだから、わかってる。小橋もヘタするなよ。この人の側から離れるなよ」

そしてフラウスを振り返り、

「行く。連れていってくれ」

「正規軍だ！　くるぞ！」

ギシ、と目を覚ます。

暗闇の中、縛られたままで全く体の自由が利かない。

三日前からずっとこうだ。

食事も与えられず、たまに見物に来ては貧弱だと笑っていく。学生服はとうにはぎ取られている。

小便もたれ流すほかなく、人生で初めて経験した畜生並の扱いだった。

彼らの目的もわからず、なぜ自分がここにいるかもわからず、おぼつかぬ思考のなか、ただ無為に怯えているだけだ。

だから外が騒がしくなった今も、彼は震えている。

「迎え撃て！　奴らさえやっちまえば、正規軍に余力はねぇ！」

助けてほしかった。誰でもいい。ここから逃がしてくれさえすれば、なんだっていい。

余市隆弥は中学生の時に見た深夜アニメにのめり込んだ結果、日陰者の道を歩くことになった。

いや、適切ではない。内気で小心者だったのが、さらに内向的な趣味に目覚めただけのことである。

元々学校のヒエラルキーでは底辺だった彼は、同じく底辺である乱堂忍とつるむようになった。高校に入ってからも友達はオタクば

かりで、しかし別段、それに不満を抱いたことはない。
アニメの話題は楽しかったし、どのキャラが好きだのあの展開はいただけないだの、自分でも結構充実したと思っている。

彼女は望むべくもなかったが、１８禁のゲームを忍に借りたり、かわいい絵のライトノベルやマンガで用を足していた。

ＴＲＰＧを始めたのはやはり忍に誘われたからで、高校に入ってからは鳴島鳥夫を含めた六人ほどで、ゲームマスターを持ち回りで楽しんでいた。
始業式の後も、短いセッションの後は忍の家で集まるはずだったのだ。
彼はエルフの魔術師で、後衛から仲間たちをサポートするなくてはならないメンバーだった。

それが今だ。

捕まってからどれだけたったかはわからない。

ゲームの世界に迷い込んでしまったのだ、と思ったこともあった。
ネット小説でよく読んだ。突然異世界に召喚された主人公は、手に入れた神をも凌駕する力で傍若無人に暴れ回り、美少女等を捕まえては惚れさせている。

だがそれは、その儚い希望は、あっという間に打ち砕かれた。なにしろ捕まっているし、女性など見ていない。周りには、いとも簡単に彼の命を奪うことのできる乱暴者ばかりだ。

なにかの間違いだ。
あってはならないことなのだ。

涼一は遥か前方にいる。絵里はフラウスのやや後方、百人程度の軍隊の最奥部にいた。兵士たちは皆、鋼鉄製の鎧兜に身を包み、剣を穿いて更新している。
馬に乗っているのは数人。フラウス、バウィエ、後は隊の周りを忙しく走り回っている。時たまフラウスの元へ、何事か伝令に来ていた。

「相手は森だから、矢を高くとばすことはできない。ここまでは届かないから安心しろ」

フラウスは翼と角を持った馬にまたがっていた。豪勢な、羽根飾りのついた兜を被っている。

「……納得いかないことがあります」
「今でなくてはダメか」
「ダメじゃないッス。でも、どうして松凪サンを誘ったッスか。怪しくはないんですか」
「砂烈団の構成員、ましてや副長を殺したのなら、お前たちの依るべきは正規軍にしかない。敵の敵は味方だ」
「だからって、あれだけで戦力になるとは考えられないッス。別の原因で死んで、私たちが自分がやったように言ってるだけかもしれないのに」

「そうなのか？」
「ごまかさないでください！」
周りの兵士たちが絵里を見た。が、前方注視というフラウスの声で、すぐに元に戻る。
「悪く思うな。だが今の私ではお前を納得させることは難しい。ここは素直に、お前たちの仲間を助けるように提案しただけだと考えてくれ」
「敵と通じているかもしれないんですよ」
「ならばお前をここに残すまい」
「私にも、松凪サンと同じ力があるかもしれない」
「私が死んで正規軍が瓦解すると考えているならよほどありがたい。砂烈団がそこまでバカであれば、この戦いも楽だろう」
ああいえばこう返ってくる。だがフラウスの理論は敵であるという可能性を否定する消去法で、積極的に涼一たち異邦人を認めるものではない。
「コバシ。見も知らぬ私がナギになにを望んでいるかわからないのはわかる。死ぬ可能性もあるだろう、戦場だからな。だが私には、一つあてがあるのだ」
「あて……？」
「ああ、ナギは生き残るぞ」
確信めいた物言いは……その理由は定かではないが……

「ナギといったな」

バウィエが馬の上から言う。

松凪、と訂正したところで、大した意味はない。

「戦いが始まればお前を守るものは自分だけだ。今から布陣するが、お前はレンジェとともに別行動しろ」

「別行動？　どうして」

「ホワイト将軍の命だ。お前はできるだけ砂烈団に見つからないようにして、奴らの本拠地の側でしばらく潜んでいろ。レンジェ、任せる。奴らが出払ったら潜入だ」

「御意」

レンジェに招かれつつ隊を離れ、南へと下る。

森を横目に見ながら、隠れるところの少ない平原を、草むらの中、どうにか歩いていた。体を屈めているので腰が痛くなる。

「砂烈団の連中は隊の動きを注視していますから、十分離れて森に入ります。なに、ドレマンが欠けたんなら後は筋肉自慢ばっかですわ。こっちには気づきません」

レンジェは、年齢だけで言えば涼一と変わらなそうな青年だった。体つきは小さいが、作りは大違いである。中腰でもまったくぶれずに、素早く進んでいる。

おいて行かれないようにするのが精一杯だ。ほかの兵士とは違い、革でできた身軽そうな鎧に、短刀を挿している。

「剣の扱いには慣れてなさそうなので、無理に使う必要はありません。真正面から二人倒せるのなら、むしろ素手のほうがいいですわな。あまり音を立てないように」

借りた剣がガチャガチャと鳴っていることを言われたのだろう。
「俺についてきてよかったのか。あんたも戦力なんだろ」
「あっしは戦闘が始まるまでが仕事ですわ。見ての通り、非力なもんで」

とてもそうは見えない。日本の力自慢に、彼異常の筋肉を持った人間がどれほどいるだろうか。
体格の基準がまるで違うことに、改めて涼一は全く違う世界なのだと思い知らされた。涼一が飢餓だと思われたのも納得がいく。

「いやいや、これは戦士としてですわ。訓練していない男なら、まああんたほどじゃありませんが、ひょろっちいヤツもいますわな。むしろその体でどうやって殴り殺せるのか知りたいもんです」

見せてもらう機会があるやもしれません、とレンジェは言った。

「さて、しばらくここで待ちます。その間に休憩と、心の準備をしておくんですな。フラウス将軍の話では戦いの経験自体がほとんどないそうですが、いざ始まっちまったら、相手はそんなことお構いなしですぜ」
「……戦いっていったら、やっぱり殺しあいか」
「そりゃ、そうですわな。特に砂烈団はタチが悪い。今のうちに皆殺しにしておかないと、いつ背後を突かれるかわかったもんじゃありませんわ」
「隣国と戦争するって言ってたな」

水筒を差し出しながら、レンジェは言った。

「あんた、本当になにも知らないんですな。マルドールだけじゃありませんわ。南のセンとも、もしかするとコトを構えるかもしれない。まさに一触即発です」
「なんでそんなことになったんだ？」
「それは言うなと言われている。たぶん、いずれフラウス将軍から話があるでしょうな……早けりゃ、この結界が解かれた後でも」

その言い方になにか含んだところがありそうで、涼一はいぶかしんだ。

「なにか知ってるのか？」
「すぐにわかりますわ。生き残ったら」

それと同時に、鐘が鳴った。

「始まりました」

男たちの雄叫びが、ここまで届いた。

「行きましょう。さ、ここからは常に気を緩めないように。念のためぐるりと回り込んで奴らのの根城の裏に回り込みます。おそらく誰にも会わないと思いますが、絶対じゃありませんわ。あっしもあんたの命の保証はできません。会ったら殺す。これを忘れないように」

うなずく。だがレンジェの言った「会ったら殺す」をどれほど理解していることか。いざ戦いになって、涼一は敵に向かっていけるのだろうか。

だが、だがしかし。

クラスメートを助けねばならないのだ。

レンジェの合図で、体を低くしたまま、草むらから飛び出して森の中へと突っ込んだ。すぐさま大樹の陰に寄り、息を潜める。レンジェが耳を澄まして、

「誰もいませんわ。森の戦いは時間がかかる。焦らずにゆっくり行きましょう」

命に関わることだ。慎重になるのはわかる。タイミングは戦局次第だから急ぐ意味がないのもわかる。

だが、クラスメートが捕まっていて、いつ死んでもおかしくない。焦りを抑えるのには苦労した。

「常に周りに気を配るように。罠がある時は教えますから、ひっかからないように」

罠。

「おそらくあんたの仲間は罠に引っかかったんですわな。奴ら、基本的に追い剥ぎですから、死にはしませんわ。この結界張られてから仕掛け直してなけりゃね」

戦士たちが森に向かって進軍を始めたのと同時に、風切り音がいくつも聞こえた。よく見えないが、何かに当たっている。

「矢だ。森の戦いは中にはいるまでが一つの勝負でな。この森は獣道しかない古い森で、隊列を組んで素早く入る道が無い。だからこのように、中から放たれる矢を盾で防ぎながら前進するのだ」
「盾で……防げるものなんスか」

悲鳴。

「完全に防げるのなら矢はいらん。だがまあ、木でも鋼鉄でもあったほうがずっといい。それにさっきも言ったとおり、森では矢が打ち上げられん。真っ正面から飛んでくるなら、真っ正面に盾を構えておけばいいのだから楽だな」

楽だというフラウスは、しかし緊張した面もちを崩さない。

「まずは森の入り口を制圧する。その後、相手は散ってゲリラ戦でくる。用意する間を与えずに追撃できるかが二番目の山だ」

怒声が轟いた。
金属音が森のあちこちで響き初める。

命のやりとりが始まったのだと、わかった。

しかし現実味が全くない。今、自分が立っているすぐ近くで、殺し殺されているという、その事実。
まだ絵里は、これがフィクションなのだと期待しているのだ。

4

部屋の外が喧噪でいっぱいになった。

隆弥の呼吸が、動悸が速くなる。なにが起きているのか知らないが、なにかが起きているのは間違いない。それに先ほどから聞こえる「攻めてきた」という言葉。「迎え撃つ」という言葉。

猿ぐつわが切れそうなほどに、奥歯を噛みしめていた。後ろ手に縛られた上から、さらにギチギチに体全体をロープで拘束されている。あちこちがすり切れすほどもがいても、いっこうに解放されない。

この場から消えてしまいたい。喧嘩などとは全く無縁の、無害な人生を送ってきた。それでなにも問題なかったのだ。今回も自分など無視して、やりたいもの同士でやってくれればいいのだ。

しかし扉の前で、不穏な会話が始まった。

「おい、あの小僧を放っておいていいのか」
「あれだけ縛ってんだ。なにもできねえし時間もねえ」
「だがよ、ロッツのバカを投げ飛ばしやがったヤツの仲間だって話じゃねえか。体格なんぞあてにならんぞ」
「お前、まさか信じてんのか？　いや、たとえそうだとしても、あのガキ、今までそんなそぶりなんてぜんぜんなかっただろうがよ」
「この攻撃を待ってたのかもしれねえ」
「考えすぎだ。行くぞ、さすがに正規軍だと無事じゃすまねぇんだ」
「いいや、俺は殺しておいた方がいいと思うぜ。動けないならなおさら今のうちだ。殺しておいたら、ふん、それこそ安心だ」

「ボスは殺せといってねえぞ」
「戦いが始まって言うのを忘れただけさ……」
「つきあいきれねえ。先に行ってるぞ」
「おうよ。すぐに追いつくぜ」

この会話が、まさか自分を対象にしたものだとは、信じられなかった。

殺しておいた方がいい、だと？

背中をわき上がる怖気に、わき上がる涙。

意味がわからない。

なにもしてないではないか。なにをする力もないではないか。なぜ構うのだ。
今までがそうだったように、これからも無害に、地味に生きていたいというだけなのだ。
生きていても邪魔などしないし、しようとも思わない。勝手にしててくれ。こんな騒ぎなどとは全く関係ない人間だ。

だが。

目の前の扉がガタガタと鳴って、

「チッ。鍵はどこだ」

それが逃げようもない運命なのだと、目の前に突きつけられた。

「めんどくせえなぁ」

少しの間。

ドンッ！

「ウグッ」

我知らず声が。扉が乱暴に蹴られたのだ。何度も何度も。そのたびに外から漏れ入ってくる光が大きくなる。何度も何度も。これでは……開いてしまう！

戦闘が途絶えた。

音の聞こえていた方を見た涼一は、先行するレンジェがそのまま行ってしまうのを見て慌てる。

「お、おい、まさかもう終わったのか」

慌てて進みながら言う。

「んなワケありませんわな。まだ緒戦が終わっただけです。これから進入した隊と散開した砂烈団のゲリラ戦が始まります。遭遇の確率もあがりますんで、これまで以上に注意してください。こんなところまで来んとは思いますがね」

ドレマンがいたならこれほど簡単じゃありませんわ、とレンジェは続けた。

「あんたが殺しておいてくれてよかった」

レンジェに他意はない。この世界ではこれが普通だ。特に軍人なら、勝利までの道が楽になるのは大歓迎のはずだ。

だが、涼一にはその言葉がきつかった。

「ドレ……ドレマンってのは、やっかいなヤツだったのか」

「まあ、参謀役ですわな。ほかよりちいとばかし頭が回るってだけで、脅威ってまではいきませんが。ただいるよりいない方が楽なのは確かですわ」

上り坂になった。

「このまま山を上って、完全に背後に回ります。実のところ、あんたたちが襲われた場所の近くでしてね。お連れさんの話を聞いて、ちょうど探しに来たところで場所がわかったってわけです。奴らに本拠の場所を勘違いさせられていました」

「勘違い？」

「ええ、撤退の仕方がおかしいとは思ってたんですが。ドレマンの死体が放置されてたのも、相手側に頭の回るヤツがいない証拠ですわ。死体さえなけりゃ、あっしらはまだドレマンが生きていると思ってたんだ……おっと、見てください。ここ、草で隠れているが細い紐が張ってある」

「……引っかかったらどうなるんだ？」

「わかりませんわな。かかってみますかい。どうせ鳴り木か落とし穴かですわ。ですから、この紐の先も踏んじゃいけねぇ。倒れ込んだところになにがあるかわかったもんじゃありません」

レンジェの講義を聞きながら、あたりを観察する。紐はかろうじて見分けられるが、その先になにが隠されているかなどさっぱりわ

からない。何の変哲もない、草むらが広がっているようにしか見えない。

「さあ、これからは戦場に近くなります。西には十分注意でお願いしますわ」

戦闘音が再開されても、フラウス・ホワイトは顔色一つ変えなかった。十数人残っていた兵士の数人を、森に入る前に倒れた者の回収にあたらせている。

「山賊にとってはこれからが本番……といっても、人数もこちらの方が勝っている。多少手こずるだろうが、まあナギにとってはちょうどいいだろう」

絵里がいるからだろうか、フラウスは涼一の話題をたまに振ってくる。どのような意図があるのか、顔からはわからない。

「死者はいないな」

「は、今のところ。重傷が二名、軽傷が五名。ほかの者は森に入っています」

「よし。こちらは九十、相手は三十だ。森に惑わされなければ盤石だろう。私も行く。この娘を頼む。怪我人と後方で待機しておけ」

「ま、待ってください！　私も行くッス！」

それを聞いたフラウスが振り返ると、

その目が、

「今なんだと？」

あまりにも冷たく、睨まれただけで軽いショックを受けた。

わかっている。自分など役立たずの足手まといだ。戦う力もなければ身を守る力もない。どんな事故で死んでしまうかもわからぬ。連れていくメリットなど皆無。

しかし、近くの兵士から盾をはぎ取って、メガネの位置を直しながら、絵里は叫んだ。

「ま、松凪サンが心配なんです、悪いッスか！」

フラウスは……以外にも、ちょっと驚いたような顔で、あまりにもあっさりと盾を奪い取られた哀れな兵士に目を向けた。男がやはり驚きながら首を振ると、

「……では、肝に銘じておけ。死ねばそれまでだ。その盾を離すな。絶対にだ。その馬鹿力で持っていれば、少なくとも奪われることはなかろう」

馬鹿力の意味を考えている絵里の隣に降りたって、フラウスは剣を抜いた。

「では行こう。五人来い。三人でコバシを守れ。ここらの賊は掃討しただろうが気を抜くなよ」

歩き出す。兵士が蹴散らしたとは言え、矢の飛んでこない保証などいっさい無い中を悠々と。絵里はおっかなびっくり、鋼鉄製の、

どうみても三キロはくだらない盾に全身を預け、おっかなびっくり続いた。

最後の一撃が、彼と賊を隔てるたった一枚の障壁を破った。外の喧噪は遠くに遠ざかっていて、今はむしろ、この建物の中は静まりかえっているように見える。

「けっ。手間取らせやがって」

その男はいかつかった。プロレスラー顔負けの体を、ほとんどボロに近い汚れた衣服と胸当てでわずかに覆っている。同時に入り込んでくる熱気が部屋を急速に暖めていった。太陽の光が届かなかったこの部屋はずいぶんと冷え込んでいたのだろう。

そして男のほとんど半裸に近い格好は、この熱気の中ではある種当然の装いだ。

だが、むせかえるほどの蛮臭！

知性のかけらも感じさせない下品で汚い顔、細かい作業などと全く無縁のゴツゴツした手。丸太のような腕がついた、怪物のごとき体躯。

それが逆行に照らされ、のしのしと動いている！

気絶すらもできない。生存本能は、ここで気を失えば助かる望みなど一点もなくなってしまうことを知っている。

だからといって、動きようもないこの状況では、意識を失わないからといってなにができようものか。いや、体が自由であっても、なにもできまい。

この男が殺そうと思ったのなら、それは速やかに果たされるはずだった。

「起きてやがったか。ま、ちょうどいいわな」

だが。

殺す前に、なにか考えているのであれば。

隆弥を見つけて、すぐに殺せばなんの問題もなかったのだ。

男は腰のナイフを抜いて、隆弥を縛っていたロープを断ち切った。

一瞬、助けてくれるのかと思った。

「動くんじゃねぇ。殺すぞ」

そして、大きな掌で隆弥の両手首をつかみあげて、

ナイフをベルトへ、

「！！！！」

なにをされるのか、それに思い当たったとき、隆弥の思考は爆発した。

「殺すぞ」

満面の笑みで、ベルトをも切る。その笑顔に安らぎなど覚えるはずもなく、声を上げることも叶わず、隆弥は絶望のうちにズボンをおろされた。

「泣くのは構わねえし、今なら声を出しても構わねえ。その方がいい」

今度はグツグツと声を上げて笑う。息が臭かった。

放り投げられ、荷物の中に倒れ込む隆弥。男は鼻歌を歌いながらのしかかってくる。

「や……やめ……」

目を見て懇願すれば、許してくれる……はずもなかったが、もはや隆弥に残された手段は一つしかなかった。おぞましい蛮族に良心の一片を期待するしかなかった。

だがそれは蛮族の欲を刺激するものでしかなかったようで……

尻になま暖かいなにかが押しつけられた時、今度こそ隆弥は悲鳴をあげた。

「それだよ、それ」

男はますます愉悦に浸っていき、自分の下から逃れようともがく隆弥を両腕で押さえつけた。

「やめて！　許して！」

「そうそう、もっとだ」

泣き叫ぶ隆弥の顔がそれほど気に入ったのか、しばらく男は動かなかった。もはや言葉かどうかも怪しい隆弥の懇願を受けた上で、

ただ笑っている。交渉の余地は全くない。

だが、それが結果的に、隆弥の貞操を救った。

隆弥の悲鳴が最高潮に達したとき……すなわち、隆弥のストレスが限界値に達したとき、彼の右目がまばゆい金色に輝いたのだ！

それを凝視した山賊は、即座に異変に気づいた。いや、どちらかというと山賊自体に異変が起こった。

山賊は飛ぶように隆弥から離れると、

「な、なんだお前ら、どっから沸いた！」

誰もいない空間に向かって、叫んだ。

隆弥はそれに気づかない。限界まで追いつめられた彼にまともな思考はできず、かすかに痙攣しながら、今は下半身まるだしのままほとんど気絶していた。瞳の輝きは、すでに消えている。

その前で、男はナイフを抜いた。

「み、見ねえ顔だな。正規軍じゃねえな！　なんでこんなところに！」

返事はない。が、

「こ、殺すのか！？　返り討ちにしてやるよ！」

と続け……

自らの首をかききって、血をまき散らしながら倒れた。

5

うつ伏せに二人。

高いところから茂みに隠れ、戦闘を見守っている。

涼一は先ほどから気が気でない。あたりの警戒はもちろん、まさかフラウス率いる正規軍が負けやしないか、クラスメートはどうなっているかなど、なにから心配すればいいのかというありさまである。

「まだか……まだか」

小声で呟いていることに自分でも気づいていなかった。その隣でレンジェは、冷静に経過を眺めているようだった。彼らの潜んでいる坂の下に、木造の粗末な建物がある。おそらく根城の一部分で、ほかは山を掘って作られているようだ。

「あと少しですわ。我慢してください。ヘタうつと出てきた連中とかちあう」

わかっている。見えない入り口からは、断続的に賊が出てきているのがわかった。数人規模ですでに三回、森の中を器用に走っていった。

「用意のできたヤツから参加しているようですわ。能なしっちゃこのことだ……さあ、そろそろだ。心の準備はできてますかい」

「いくのか？」

「さっきの連中が出てからしばらくたっている。二十数えましょう。その間に気をしっかり持つんですな。手が震えているの、気づいて

ますか」

言われて、反射的に右手を押さえた。気づいてしまえば、震えているのは手だけではない。足も肩も、立ち上がるのが困難なほど。

「それじゃダメですわ。深呼吸深呼吸。さっきも言いましたが、あっしは戦闘向きじゃない。なかで敵に会えば余裕はありません。自分のことは自分でどうにか、やってください」

「わかってる」

深呼吸。どうにかみっともない震えは収まる。息を忘れていたため酸欠になっていたのだった。あまりにも……あまりにも情けない。

「立って。行きます」

こわごわと立ち上がる。しっかり立っているのを見て、レンジェは笑った。一瞬だけ。涼一の肩をたたくと、

「その意気ですわ」

音を立ててはいけない。辺り一面が草や砂利などでそれは難しい。苦労しながら坂を下ると、砂烈団の根城のすぐ脇、入り口から死角になるところで様子を見ているレンジェに追いつく。

ここからは喋ってもいけない。

レンジェは驚くほど静かに、入り口まで移動する。建物の影に隠れて、涼一は彼を見送る。賊が戻ってくればすぐに見つかる。それを見張るのが涼一の仕事だった。

レンジェが中を確認している間、とくに動きらしいものはなかった。西の方では相変わらず剣戟の音が響いている。まだ戦闘は終わっていない。

合図。

涼一は、今度は全力で入り口まで走った。ここでのらりくらりしている暇は無かった。飛び込んでも安全なことを、レンジェが確認しているからできる行動だ。

根城の中に入って、二人で扉を閉める。ギィ、と軋んで、涼一は全身に冷や汗をかいた。気づかれはしなかったか。

レンジェの後に続き、静かに進む。入り口はホールのようになっていて、いろいろな物が乱雑に放り出されてある。教室ほどの広さの向こうに通路が続いていた。

足下は地面のまま、板と丸太を組み合わせた簡素な小屋で、すぐに洞窟になっているようだ。

あるいは、元からある天然の洞窟の入り口に建物をこしらえたのかもしれない。

洞窟のままの方が見つかりにくいと思うのだが。疑問を胸に、涼一は歩いた。腰の剣が音を立てないように右手で抑えながら。

わずかに進んだ先、やはり開けた場所にでる。ここは四方に通路が延びていた。

太陽の光はもう届かないが、たいまつのおかげで闇ではない。薄暗い中、壁に沿って右手の通路へ近寄る。

先は暗い。ぼんやりと火のないたいまつが見える。おそらく使わないときは明かりをつけていないのだろう。

レンジェを振り返ると、彼はゆっくりと腕を回した。

ぐるりと、一度すべての通路覗くつもりなのだ。明かりの漏れて

いるところもある。
そのとき、どやどやと数人が走ってくる音がして、涼一は戦慄した。

ぐらり、と絵里の体が傾いだ。素早く兵士たちが彼女を囲み、あらゆる包囲からの盾となる。奇襲と判断しての所作だった。
あらかじめ下知されたフラウスの指示であり、言葉とは裏腹に、彼女は異邦人を気にかけている様子である。
絵里が体勢を崩したのはしかし、矢で入られたからではない。両手で抱えた盾が地面へと刺さる。それに寄りかかりながら、彼女は混乱している。

言葉で表すのが難しい。あえて言うなら、彼女の目の前に突然、未知の光景が広がったのだ。
より詳細に書くのなら、今見えているはずの景色とは別の、木の上から森を俯瞰しているような構図が、突如目の前に現れた。思わず落下の危険を感じ、体を硬直させて、これだ。
周囲を見回しながら、フラウスは剣を構える。

「コバシ、怪我は」
「い、いえ、どうもないッス。いやなんていうか……」

今、彼女は盾を杖のようにし、かがんだ状態で地面を見ているはずだった。だが目の前はやはり違う。森の中にわずかに開いた広場を、見下ろしている。
なにがなんだかわからぬ。

「す、すいません、立ちくらみが」
「警戒を続けろ」
フラウスは剣を鞘に戻し、絵里の顔をのぞき込んだ。もちろん絵里には見えない。
「どうした」
「え、ええと。説明しにくいんスけど」
その時、気づく。動きがあった。
定点カメラのように森の光景を移している彼女の視界、その左隅に、兵士が写っている。出で立ちに見覚えがあり……たしか、この兵士はすぐ目の前を歩いているはずの……
右側に、人影が現れた。
知らず、背筋に悪寒が走る。人影は、兵士に比べて非常に大きい。というよりカメラに近い。となると木の上にいる。その人影はゆっくりと弓を構えると、矢を、
「上ッス！　木の上に！」
反射的に、絵里は叫んだ。
迅速だった。素早く反応したフラウスは、兵士たちの影からあたりを見回す。
向かう先の木、その上に二人の山賊が潜んでいるのを見て取った。汚れとメイクでほとんど背景と同化していたが、わかれば見逃さぬ。
「オロス！　貴様の前方だ、やれっ！」

そう叫んだとき、すでに彼女は部下の背中から短弓を引き抜いている。同じく部下の腰の矢筒から一本を抜き、迅速に射た。

砂烈団の射手より速かったのは、絵里の大声に狼狽したからだ。目の前の集団は二人に気づいていないカモだ。見られた様子はない。それなのに、うずくまった一人が急に自分たちの場所を叫んだ。意味不明のことに、反応が遅れた。

一人の肩に矢が突き刺さり、バランスを崩して落ちる。

残った方は急速に思考する。どうすればここを逃れられるか。奇襲して大将首を取り兵士たちがうろたえている間に逃げ出すはずが、あっという間に臨戦態勢である。

程なく、先頭を進んでいたオロスが木を伝って逃げようとした山賊を撃ち落とした。

兵士たちが山賊をふんじばっている間に、絵里の視界は正常に戻りつつある。瞬きしたり手で覆ったりしながら、絵里はしきりに首を傾げていた。

「なにがあった、コバシ」

「いえ、その、なんか、突然へんな光景が……あそこから下を見下ろしているような」

フラウスは山賊が潜んでいた木の上を見る。

「コバシ、お前はここに覚えはないか」

「は、覚え？　どこも同じに見えるッスけど」

「見ろ」

所々に見える、赤い染みを示す。赤と言うよりほとんど黒い。

血の後だと思われる。

「ここはお前とナギがドレマンに襲われた場所だ。なにか関係があるかもしれん」

足音が遠ざかった後、レンジェが顔を出した。涼一の心臓は早鐘を打っている。

先ほど、急にレンジェに突き飛ばされ、最初にのぞき込んだ暗い通路に押し込まれた。

暗いとはいっても扉などがあるわけでなく、山賊たちが注意をこらせばあっという間に見つかってしまったはずだ。

だが山賊たちは二人に気づかず、そのまま入り口へと走っていった。照らされた中で見たのは五人。尻餅をついたときの大きめの音は、どうやら彼ら自身が出していた騒音で聞こえなかったようだった。

もし見つかっていたら五人と戦わねばならなかった。

今までとは違う、ただ暑いだけではない汗が背中を濡らしている。

立ち上がろうとしたとき、涼一の耳に何かが飛び込んできた。先に行こうとするレンジェの肩を掴む。

耳をそばだてる。泣き声のような、うめき声のような、かすかな声。この暗い通路の向こう側からだ。声の元を指さすと、

「よく気づいたもんですわ。明かりはつけないで行きます。手を離さないように」

ほとんど息だけで、レンジェは言った。涼一はうなずくと、ゆっくりと歩き出すレンジェの肩に手をおいたまま、ついていく。

途中で曲がった。通路自体が左に折れていて、十メートルほど先でさらに右に折れている。その向こうから明かりが漏れてきている。

角に到達し、レンジェがのぞき込む。

「動きがない。誰もいませんわ。入って扉を閉めましょう」

ドアを閉める。

「ここに一つドア。見てください、結構広い。ドアが六つ。おそらく倉庫ですわ。鍵とかついてるところを見ると、普段は奪った物やらを入れてるんですわな。二手に分かれましょう。あんたは鍵のついてない、奥のからお願いします」

「わかった」

一番奥の扉は、鍵どころかドアも開きっぱなしだ。おそらくなにも入っていないのだろう。

という涼一の予想は、とんでもない形で裏切られた。

のぞき込んだ涼一の目に、どういうわけか死体が目に入った。

でかい図体に半裸の薄汚い男、これは山賊の一人だろうが、なぜこんなところで死んでいる？
それに、その奥の小さな……小さな、少年は……
涼一は慌てて駆け寄った。自分のクラスメートだと祈りながら、そして全く動かない彼が、まだ生きていることを祈りながら。

途中で血だまりを踏みつけ、よろける。倒れ込むように飛びついた少年の、ズボンも下着も脱がされているのを見て、彼は慌てた。この部屋でなにが行われていたのか想像もしたくない。

とにかく生きていることを確認したい。黒い髪に、明かりが松明なためわかりにくいが、色白。シャツの作りがよい。それにこの脱がされたズボンは詰め襟のもののようだ。
涼一は確信した。クラスメートに違いない。そうすると、泥だらけで頬の痩けた顔が、見覚えのあるもののように思えてくる。

いた。確かにいたぞ。印象は薄いが、わかりやすいオタクたる乱堂忍と遊んでいる、そうだ、余市隆弥！

「よ、余市、余市君だろ！　おいっ！」

頬をたたく。肩を揺する。彼もこの世界に来ていた。そして砂烈団につかまり、もしかして……性的な乱暴までも受けているかもしれぬ。

「生きてるよな！　目開けろよ、余市、余市！」
「いたんですか、ナギ」
「ああ、こっちだ！」

入り口に向かって叫ぶ。そしてまた余市に視線を戻し、

彼の目が開いていて、
そして、右目が目映いほどに光っていて、
閉じる。
その瞬間、涼一は背後に気配を感じた。レンジェではない。彼よりももっと荒々しい、野蛮な息づかい。
振り向いた。
入り口に、どこかで見たような巨体。というより、この山賊どもの見分けが、涼一にはあまりつかない。
そいつがナイフを抜いて、笑っている。
レンジェはどうした！
殴りかかったが、避けられた。小部屋から飛び出すと、涼一は腰から剣を抜く。
練習などしていないが、もしも殺すことになったなら。
手に残るあの感触はもう味わいたくなかった。
山賊の背後で、レンジェが驚愕に目を見開いているのが見える。
涼一は舌打ちした。さんざんえらそうな口をたたいて、気づきもしない！
あの筋力を信じろ。ロッツを投げ飛ばしたときの、ドレマンを殴り飛ばした時の。
その力で相手を突けば、どうにでもなる。
「おおっ！」

と叫んで、涼一は構えた剣を、両手で、山賊に突き刺した。
悲鳴。
そして、腹部に鋭い痛み。
なぜそうなったのかが涼一にはわからぬ。確かに自分の剣は山賊を貫いている。自分に向かって、なにものも凶器を向けていない。
にも関わらず、刃物で刺されたようなこの痛みは何だ？
じわり、と腹部から血が染み出した。山賊ではなく、自分の腹だ。
涼一の視界が、徐々に書き換わっていった。
山賊が煙のように消え、その向こうで惚けた顔のレンジェが突っ立っていた。
突きだしていたはずの両腕は、なぜか剣を逆手に持ってた。しかも右手は刃の途中、左手は柄を握りしめているため、右手から血が滴っている。
そうしないと剣が長すぎたのだろう。
理由は全くわからぬ。だが、厳然とした事実がある。
涼一は、自分で自分の腹に剣を突き立てている。

「コバシ、お前に起きた出来事はあとで話そう。さっきの二人はおそらく、先発隊をやり過ごし、私だけを狙ったものだ」

フラウスと絵里が砂烈団の拠点に着いたとき、掃討はほとんど終了していた。この拠点さえ抑えれば、砂烈団はしばらく大規模な活動ができなくなる。

あとは結界を解き、地元の地方軍に任せるという。

「将軍」

中からバウィエが出てきた。

「レンジェとナギを見つけました。レンジェは無事です」

「ま、松凪サンは……」

バウィエの言い方が、絵里に不安を抱かせる。

「重傷です」

そのとたん、いてもたってもいられず、絵里は走り出す。

「おい、待て！」

フラウスの声も無視。とにかく突き進む、驚く兵士たちの間をくぐり、かきわけ、涼一の名前を叫びながら絵里は走る。

途中、暗いせいでなんども転びながら、ほとんど迷いかけていると、

「こっちですわ」

と、男が顔をだしてきた。精悍な顔つきの、若い男。ほかの兵士に比べて軽装だった。

「速く来てください。保つかわからん」

なにが保たないというのだ。

若者に引っ張られ、倉庫に飛び込む。

同時に、目に入る血だまり。

「松凪サン！」

上半身裸で奥の方に寝かされている涼一に駆け寄る。

その腹部にざっくりと穴が開いているのを見て、危うく失神しかけた。

隣にうずくまって、若者は言った。

「この部屋に入ったあと、急に剣で自分の腹を刺しました。わからんが、幻でも見ていたみたいですわ……一応手当てはしてますが、剣は貫通していた。命の約束はできませんわ」

だから止めたのだ。

ただの高校生が、こんな戦場にのこのこと立ち入って、無事にすむわけがなかったのだ。

手を取ると、ほとんど冷たくなっている。

「松凪サン、松凪サン！」

「もう一人、あんたたちの仲間がいる」

今はそんなもの、どうでもいい。涼一が死んでしまう。
そこまで仲がよかったわけではない。ただ席が並んでいただけだ。
だが、同じクラスで半年を過ごした。
このわけのわからない世界に来て、最初に出会った。
命も救われた。
彼が目覚めるまで気が気でなかった。
どれだけ彼に依存していたか。
「死んじゃダメです！　そんなの、そんなの」
こんなところで、まさか死ぬなど、あってはならないことなのだ。
「おい、レンジェ」
フラウスの声が聞こえた。
「ナギはどうなのだ」
「死ぬかもしれませんわ」
「砂烈団か」
「いや、賊じゃない。理由はわかりませんが、自分でやりました」
その時だった。
絵里の握っていた手が、わずかに動いた。
瞼と唇が痙攣したように見えた。

そして、絵里は瞬きを忘れた。

彼女の目の前で、腹部に開いていた穴が、急速に閉じてゆく。
まるで逆再生のように、めくれていた肉がつなぎ合わさり、継ぎ目もなくなり、何事もなかったかのように綺麗になり、

「ぐっ」

体全体がビクリとはねた。
口から、ごぼりと血が吹き出た。

「げっ、げっ！」

呆気にとられていると、レンジェが絵里を押しのけ、涼一の体を横に転がす。
血を吐きながら、しかし涼一は両腕を動かした。地面をついて、顔をしかめながら。

レンジェも、声も出ない。

「いてえ……」

腹部を押さえながら、涼一。

「ま……松凪サン」

メガネがおかしくなったか。
絵里は、真っ赤に彩られた涼一の顔へ、手を伸ばす。

「こ、小橋、そこ、よ、よいちが」

「よい……ち」
「気をつけ……目を、見るな」
小部屋を振り返る。むせかえる血のにおい、その中に、大男と、小柄な少年が倒れている。
絵里が歩み寄ると、フラウスが後ろからついてきた。
少年は気絶していた。ああ、余市隆弥だ。同じクラスの、もやしっこの余市隆弥。
彼も来ていたのか。
「目を隠せ、コバシ」
フラウスが反対側に座り込み、手で隆弥の目を覆う。そのまま口元に耳をあて、
「生きているな。弱っているが、見たところ致命的な怪我もない。ただ全身に打撲痕がある。レンジェ、ナギはどうだ」
「意味がわかりませんわ。傷が完全にふさがってます」

その後のことはよく覚えていない。
気がつけば元のキャンプに戻ってきて、出された水を飲んでいる。
テントの中にはクラスメート。依然と同じように松凪涼一と、以前とは違いもう一人、余市隆弥。
「落ち着いたか」

座り込んで惚けている絵里の側に、フラウスが座った。
「戦いは終わりだ。これから結界を解いて、我らは城に戻る」
「城？」
「ノルオートだ。二日の距離だな」
「……あの、二人は」
何度も言われたが、それでも気がかりである。
「わからん……あ、いや、命に別状はない。ナギはよくわからんが、傷は完治している。おそらく貧血で、しばらくは安静にする必要があるが。もう一人はかなり衰弱しているが、目が覚め次第、なにか食わせてやれ」
「……」
「少なくとも、彼らが完調に戻るまでは城で過ごすがいい。その後の話はそれからだな」
絵里は最後まで聞いていなかった。
緊張の糸が切れたのか、この恐ろしい世界から逃れようとしたのか。
とにかく、水の入った椀を落とし、フラウスに寄りかかるように、彼女もまた気絶してしまった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0161y/

戦乱学級　～ヴェリーペア戦記～

2011年11月8日03時15分発行